

## サービスラーニングから学んだこと

社会福祉学部社会福祉学科 2年 河合 啓太

活動先：NPO 法人 りんりん

クラス：松下 典子 先生

### 1. はじめに

私にとってサービスラーニングの学びは、当初希望していたものではなかった。それゆえに、NPO に対して右も左も分からない状態から、学びを深めていくこととなった。初めは興味を持つことが出来なかったことが事実である。だが、NPO という新たな分野で学ぶことで、今まで知りえなかったことを知ることが出来た。その新しい感覚によって1年間、充実感を得て学ぶことが出来たのである。

### 2. サービスラーニングを通しての自分の成長と気づき

活動を通して、活動前と活動後でサービスを行う上で自身の考えの捉え方が変わったこと。これが私の成長した点である。私は「NPO 法人りんりん」で夏休みに6日間、サービスラーニングの活動を行った。りんりんは、児童、高齢者、両方の分野を対象とする組織である。1日目、私は利用者さんに何がしてあげられるのか？上手く関わるにはどうしたらいいのか？と個人的な狭い視野でしか捉えていなかった。そしてこの方法でこなすことを考えていた。しかし、この方法では空回りするばかりだった。利用者さんの考えを理解することが出来ない。ましてや、私の考えを伝えることすら容易ではなかったからである。サービスラーニング活動が初めての私と、今日初めて会う利用者さん。上手くやろうとした所で出来るはずがなかったのである。その日、私に出来ることって何だろう、と考えた際、してあげるという上から目線ではなく、私自身の素を出して利用者さんに関わること。まずはこれをやってみようと考えた。その結果、児童と高齢者のどちらとも関わる際に会話がはずみ、自然と打ち解けることが出来た。何よりも辛いと考えていた活動が楽しい!と思えた。特別な関わり方なんて必要ないということ。いつも通りのありのままの私でいい。ということを実感したのである。背伸びせずに私自身の出来ることをやればいいんだ、と思うと気持ちが楽になり、毎日の活動が楽しみとなった。また、今日は利用者さんの立場になって考えて行動してみよう。等と毎日一つずつ目標を持って活動を行うことにより、良かった点とともに課題を見つけることが出来るようになった。その課題から明日の目標を考えて取り組むこと。これを繰り返すことで密度の濃い充実した6日間を過ごすことが出来た。その中で4日目に学生で企画したレクレーションを行った際、ある利用者さんから「若者といると元気がでる」という言葉を頂いた。この言葉は活動の中で一番印象に残っている。私は特別に何かをしてあげようと行動するのではなく、自身の素を出して関わることを大事にして活動した結果、利用者さんからそのような言葉を頂けたことに違和感があった。むしろ、利用者さんの笑顔から私たちが元気と活力を頂けているのに、と感じたからである。だが、不思議と私自身の中で、これがいいんだ。と強いものを感じた。利用者と同じ目線で関わることで、お互いが笑顔になれること、活力をもらえることを実感したからだ。同じ気持ちを共有し合えることに嬉しさを感じた。これは、活動が終了した後考えたことなのだが、利用者も NPO の援助側も同じ地域の住民という枠組みでは、

対等な関係にある、ということだ。このことから、利用者さんに言われたこの言葉が、違和感ではなく必然的なことだと実感出来たのである。

活動を行う前までの NPO に対する考え方は、利用者に対して援助を行い、“助けてあげる”といった関係の印象だった。その考えに間違いはないと思っていた。だが、活動を通して NPO について直に活動を体験していく中で、利用者という同じ地域の住民と同じ立場のレベルで助けあいをしていく場所と考えるようになったのである。また、このイメージを持って行動するようになってから、人との出会いをより大切しようとするようになった。今回のサービスラーニング活動では利用者さんとたった 6 日間しか関わることが出来なかった。が、この 6 日間での経験、話をする中で感じたことはお互いの気持ちとして心に残る。今回出会えたことで感じたことを励みに、お互い別の場所で頑張ろうという言葉を利用者さんから頂けたからである。この 2 つの考えを持つことが出来たことが私のサービスラーニングでの成長した点である。

### 3. 活動を通して見えてきた地域活動や社会活動

今回の活動を通して、地域と住民、お互いに支えられていることで NPO が成り立っていること、それゆえに、地域との繋がりを持つことが大切ということを感じた。

りんりんでは、デイサービス、りんごクラブと称した放課後児童支援、ホームヘルプサービス等、他の NPO 施設と比べて、多種多様なサービスを行っている。デイサービスでは、決められた時間、内容をこなすのではなく、レクリエーション活動も取り入れている。ここでは、おりがみでの作品作りや書道教室、郷土芸能の鑑賞等、同じ地域に住むそれぞれの専門家を呼んで開催する等、地域の特色を活かしたサービスを提供していることが伺えた。また、デイサービス事業と放課後児童支援事業のサービスが同じ敷地内に隣接している。0 歳から 100 歳までの幅広い年齢の方の支援を対象としているからだ。だが、隣接しているにもかかわらず、今回の 6 日間では児童と高齢者が一緒に触れ合う機会が見受けられなかった。りんりんの施設の方に尋ねた所、時間や支援内容、お互いの行動レベルの差から、機会を設けることが難しいらしい。一緒にご飯を食べることや童話の読み聞かせ等、お互いが出来るレベルから徐々に展開していくことが望ましいと私は考える。隣接しているという特色をふれ合いの機会の場とし一緒に時間はなかったが、身近に生活の場を共有できる場になっていることはいいことと思った。

次に、りんりんでは昭和喫茶という喫茶店も行っている。喫茶店ということで地域の人々が気楽に利用することが出来る環境である。ということが感じられた。今回だけかもしれないが、年配の方が多く利用されているイメージを感じられたので、より幅広い世代の方に利用してもらえるような場所出来たらと考えられる。

上記のように、りんりんでは地域との繋がりに関連づけた活動を行っている。だが、充実した地域活動、社会活動を行っているがゆえに、より地域に密接した活動を行える可能性を秘めていると私は感じた。教室でのゼミにおける学習の際、先生から、「市民が決めて起こした行動を、自身の中で留めておくのではなく、地域に発信し繋げることが大事」という言葉を頂いた。この言葉は私たちが全体の場で発表することの意義としての言葉だと私は捉えているが、私たちが行った「伝える」という個人レベルからの行動を、りんりんでも行うことが求められていると私は考える。NPO そのものが歴史の中では新しく、地域

全体に深く知られていないことが考えられるからである。NPO の存在について、また、りんりんの活動について地域の住民に理解してもらうこと。その為の企画を考えることも地域活動、社会活動の一つの取り組みであると私は考える。